

## 新しい市登録文化財に「石造五輪塔」など2件

主催	加古川市教育委員会 文化財調査研究センター
日時	－（令和8年3月10日に登録）
場所	－
内容	<p>令和8年3月10日の定例教育委員会で、文化財審議委員会の答申を受けた2件の登録が議決され、市登録文化財として登録されました。</p> <p>いずれも、西国街道（山陽道）沿いにあり、地域の皆様に親しまれているものです。</p> <p>1 <sup>せきぞうごりんとう</sup>石造五輪塔 1基 所在地／平岡町新在家 786 番地の 4 所有者／新在家町内会</p> <p>2 <sup>しちきつかひ</sup>七騎塚の碑 1基 所在地／米田町船頭 306 番地の 2 所有者／船頭町内会</p> <p>なお、参考資料として、「登録理由書」、「位置図」、「写真」及び「文化財ニュース 69号（該当部分）」を添付します。 写真データは提供可能です。 （初めて <del>恒例</del> 2回目）</p>
対象（参加者）	－
定員	－
参加費	－
申込先・方法	－
目的・背景 その他	<p>加古川市では、令和6(2024)年4月に「市登録文化財制度」が始まり、今回が2度目の登録になります。</p> <p>文化財登録制度は、従来の指定制度が、文化財保護のために手厚い支援と厳しい規制があることに比べ、ゆるやかな保護措置によって保護と活用を期待するものです。</p>
市ホームページ	<del>掲載済み</del> ・ <input checked="" type="checkbox"/> 掲載予定（4月6日）・ <del>掲載しない</del>
広報かこがわ	<input checked="" type="checkbox"/> 月号に掲載・ <input checked="" type="checkbox"/> 5月号に掲載予定・ <del>掲載しない</del>



登録理由書

1 石造五輪塔 1基 《建造物》

所有者 新在家町内会 所在地 加古川市平岡町新在家 786 番地の 4

寸法／高さ 223.0cm

(基礎 高さ 56.0cm 縦横各 78.3cm、塔身 高さ 61.0cm 最大径 79.0cm、

笠 高さ 48.5cm 縦横各 72.8cm、宝珠・請花 (一石) 高さ 57.5cm 最大径 44.6cm)

材質／石造、竜山石 (流紋岩質溶結凝灰岩) 製

時代／製作時期は、室町時代前期の 15 世紀前期とみられる。

この石塔は、西国街道 (江戸時代の山陽道) 沿いの北側に建ち、江戸時代の『播磨名所巡覧図会』に「新在家ノ古塔」として載るなど、よく知られている大型で重厚感のある中世の石造五輪塔である。

材質は、この地域で採れる竜山石 (流紋岩質溶結凝灰岩) の中でも良質なものとみられる。塔の高さは 223.0cm で、基礎 (地輪) の上に最大径が 79.0cm に及ぶ塔身 (水輪) があり、その上に一辺 72.8cm と塔の大きさに比べ広がりがないが四注の勾配が強い笠 (火輪)、さらにその上に一石でつくられた請花 (風輪) と宝珠 (空輪) がある。宝珠の最大径は 40.3cm、請花の最大径が 44.6cm と塔の大きさに比べて大きなもので、塔身と合わせて、この塔に重厚感を与えている。塔の四方種子は、塔身にのみ刻まれており、北東面に「バ」、南東面に「パー」、南西面に「バン」、北西面に「バク」があり、大きさは縦横各約 12cm から 14cm で、書体は簡素なものである。

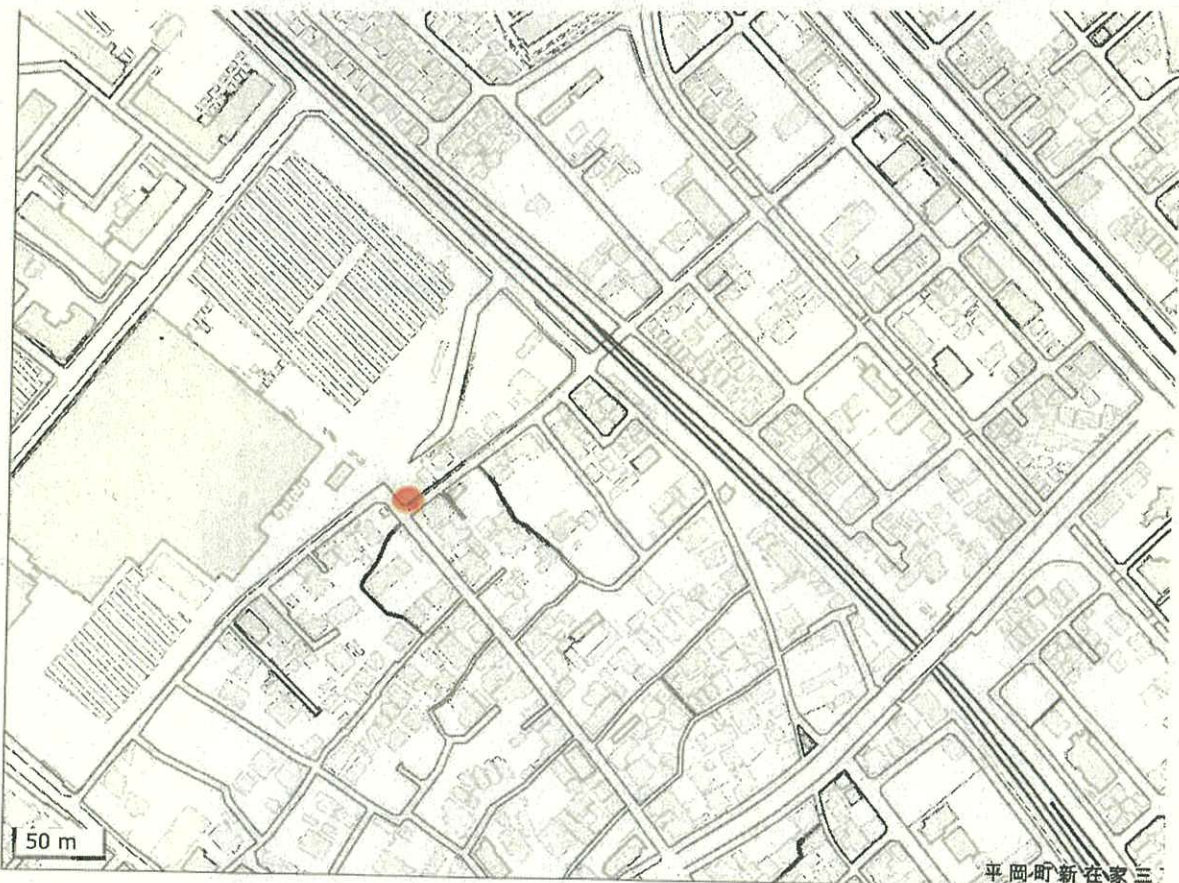
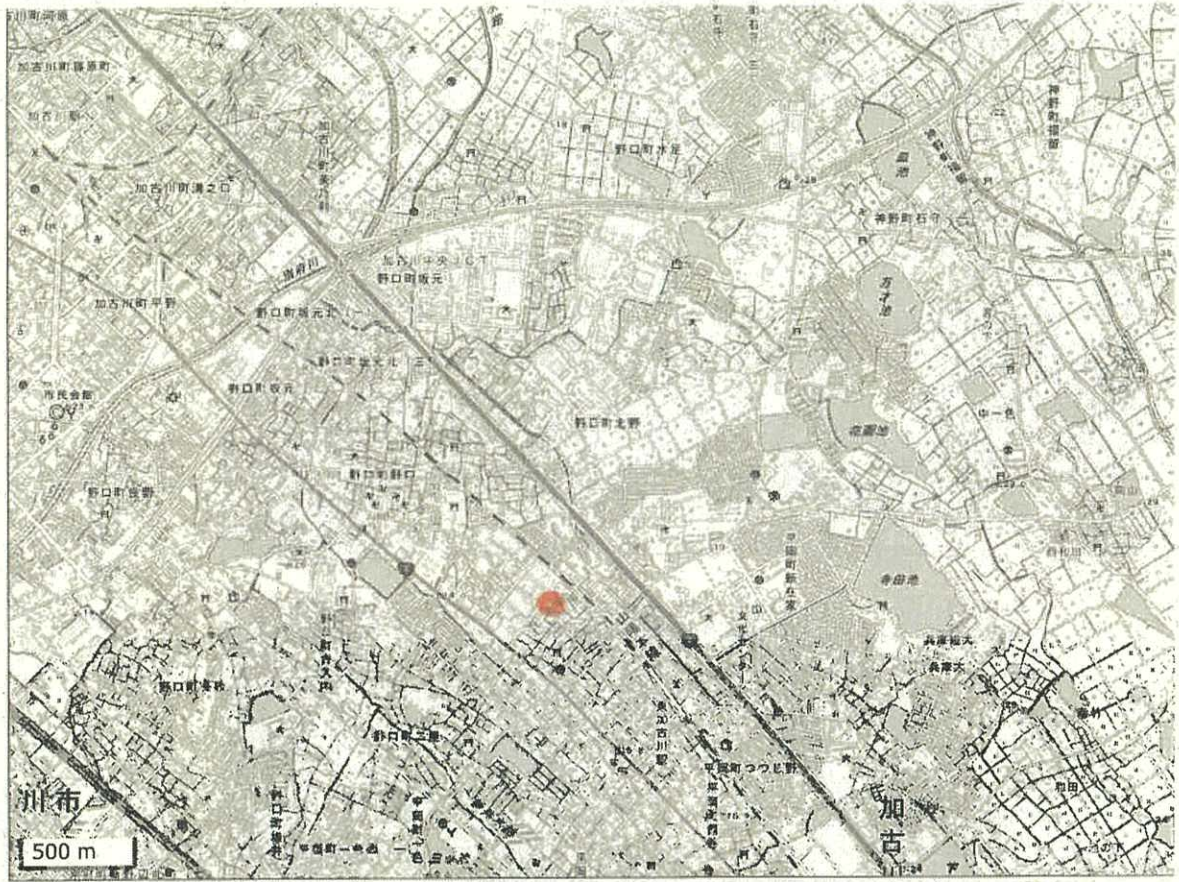
この塔の記録として、文化元 (1804) 年の『播磨名所巡覧図会』に「新在家ノ古塔、傍らに松樹を四五本うへて事ふりたり故ある人の古墳なるべし郷人云後深草ノ院建長六年に墓ぜられし足利左馬ノ頭義氏の墓なりと云」とあり、鎌倉幕府を支えた足利義氏 (1189-1254 年) の墓と伝えている。

一方、『加古郡誌』に載る近接する横蔵寺の天和 2 (1683) 年に補記された「寺記」には、この石塔の記述と考えられるものとして「彼勤堂前有五輪浮図。傳道義氏將軍古祠。」とある。そこに見える「道義」の文字が室町幕府三代將軍足利義満 (1359-1408 年) の法名であることから、この塔が、義満の供養塔として伝えられたものではないかとも考えられている。

地藏堂と呼ばれる建物の前に建つこの塔の周囲には、中世後期から近世前期頃までの小型の石塔の残欠が集められており、街道を挟んで南にある塚を含め、宗教的空間を感じさせる。

室町時代につくられ、江戸時代には名所のひとつとなり、現在も多くの人々が行き交う西国街道沿いに建つこの石塔は、大型の石造五輪塔として造形の規範となっているとともに、街道の名残りを示す風景の中で、歴史的景観に寄与するものである。

# 位置説明図





石造五輪塔  
(新在家の五輪塔)

北西からの景色



北からの近景



北西からの遠景

右側の道路が  
西国街道(山陽道)

北西からの近景

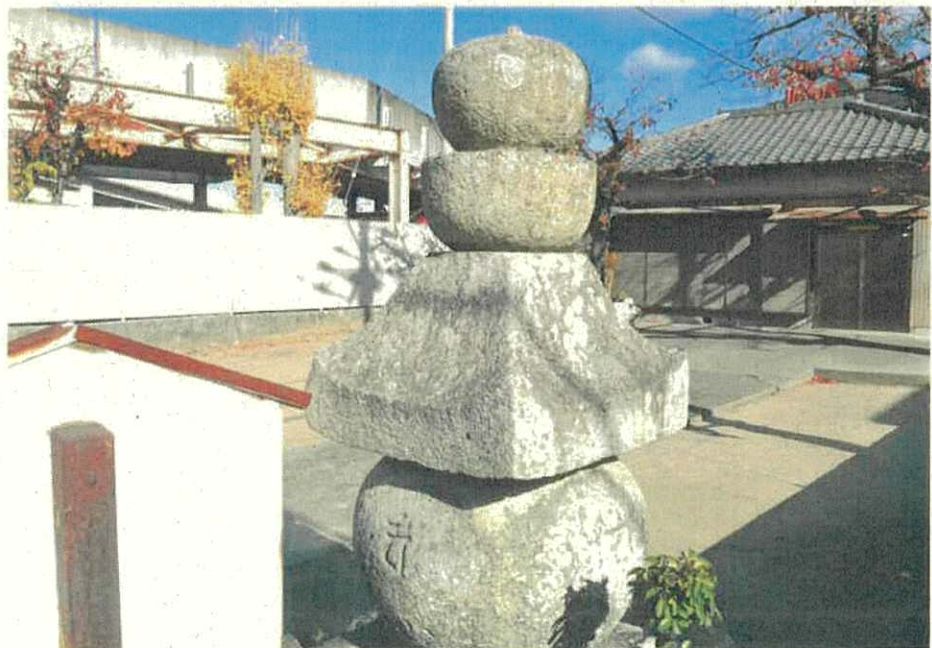


No.

東からの近景



南からの近景



登録理由書

2 しちきつか ひ 七騎塚の碑 1基 《歴史資料》

所有者 船頭町内会 所在地 加古川市米田町船頭 306 番地の 2

寸法／総高（碑石頂一下台下）182.7cm

（碑石 高さ105.0cm 幅42.5cm 奥行30.3cm、上台 高さ18.7cm 幅58.0cm 奥行43.5cm

中台 高さ30.2cm 幅80.0cm 奥行69.5cm、下台 高さ28.8cm 幅104.7cm 奥行97.0cm）

材質／石造、碑石及び上台は和泉砂岩製、中台及び下台は竜山石（流紋岩質溶結凝灰岩）製

時代／江戸時代 文化10（1813）年4月

文・書／表文は古賀精里、碑陰文と書は頼春水

この石碑は、南北朝時代はじめに、主君である出雲国守護塩冶高貞を追手から逃がすために、加古川のほとりで討ち死にした7騎の武者を顕彰するものである。

表文は幕府の儒学者である肥前の古賀精里、碑陰文と書は儒学者、詩人で頼山陽の父でもある安芸の頼春水によるもので、石碑は、文化10(1813)年、加古川驛本陣分家中谷三介、瓦屋佐右衛門らによって、加古川西堤の西国街道（江戸時代の山陽道）の南側に建てられた。その後、河川改修工事に伴い元の位置から北東方向に約130mの現在の大師堂境内に移動している。

この碑に表された七騎塚については、次のとおりである。

南北朝時代のはじめ暦応4（1341）年、塩冶高貞が、足利尊氏の執事高師直の讒言により謀反の疑いをかけられ、京都を出奔し出雲に向かう途中、追手の山名師義に、加古川驛の西で追いつかれそうになった時、弟の塩冶重貞、騎従の木村玄信、木村源五、淵名七郎、眞島兵衛、山中四郎、平田十郎左衛門の7騎が、主を討たせまいと、この場所に踏み止まり敵の軍勢と激しく戦い、遂に全員が討死してしまった。この土地の人は、7騎の忠死を憐れんで、それぞれの亡骸の近くに塚を築いて厚く葬った。後世にこれを七騎塚と呼ぶようになった。

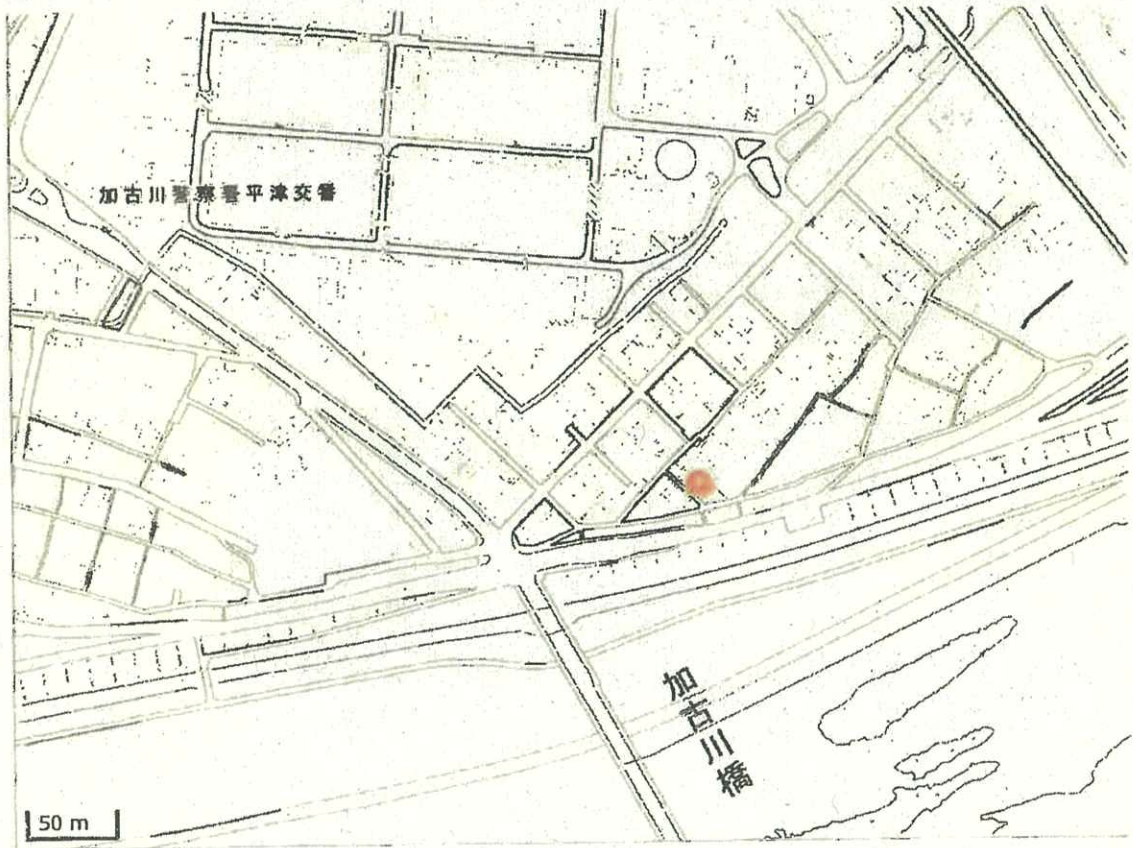
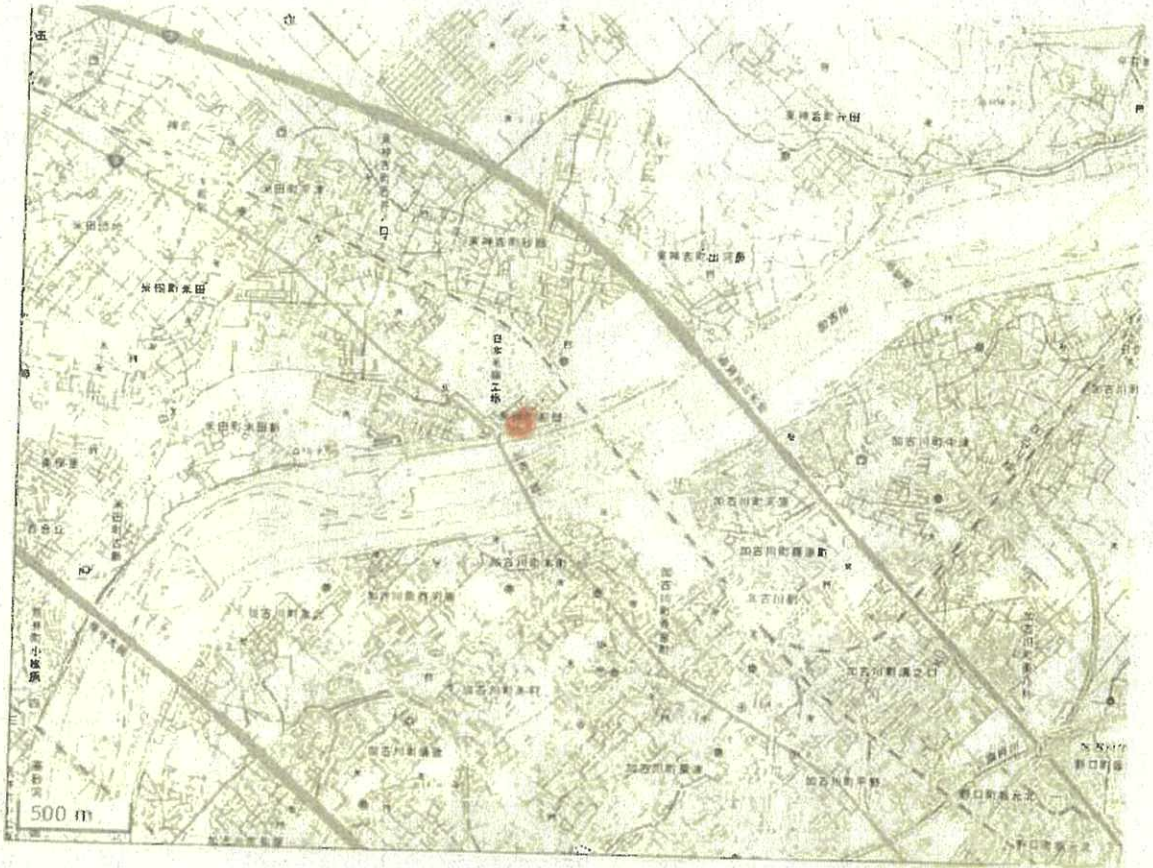
その後、寛延2(1749)年の大洪水で一つの塚が流失したのをはじめ、洪水や近代の河川改修工事による取り壊しなどによって全ての塚が無くなっている。

また、宝暦12(1762)年頃の『播磨鑑』や文化元(1804)年の『播磨名所巡覧図会』など、江戸時代の地誌や名所案内には「七騎塚」は名所として詳しく記されている。

その他、七騎塚に関係するものとして、加古川町本町の称名寺に頼春水の子である頼山陽による表文を記した七騎供養塔がある。

この石碑は、江戸時代の西国街道の名所として知られるようになっていた加古川を舞台にした物語を、優れた文章と書で表したものであり、文化的意義を有するものである。

# 位置説明図





No. \_\_\_\_\_

七騎塚の碑  
(船頭町内会)

修理・移設後の全景  
(正面、南(南東)から)



No. \_\_\_\_\_

修理・移設後の全景  
(向かって左斜め前、  
西(南西)から)

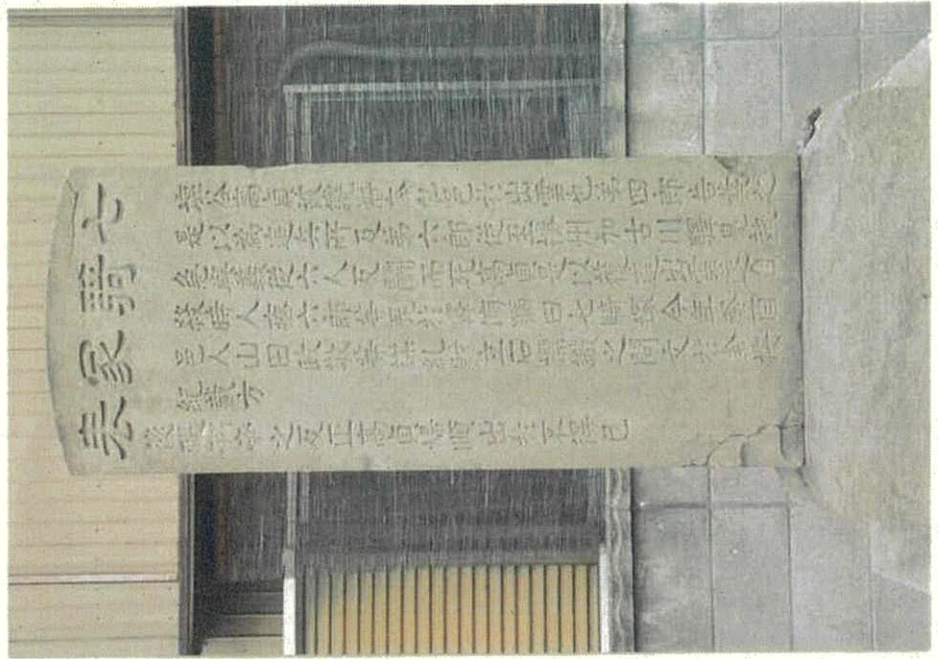


No. \_\_\_\_\_

修理・移設後の全景  
(向かって右斜め後ろ、  
東(北東)から)

No.

修理後の碑石（正面）



No.

修理後の碑石（向かって左面）



No.

修理後の碑石（裏面）



# 文化財ニュース No. 69

編集・発行 加古川市教育委員会 文化財調査研究センター

文化財調査研究センター ■所在地 〒675-0101 加古川市平岡町新在家1224-7 (中央図書館2階、JR東加古川駅から北へ徒歩約10分) ■電話 (079)423-4088 ■FAX (079)423-8975 ■事務取扱時間 平日9:15~18:00 (土・日曜、祝休日、12月29日から翌年1月3日まで、毎月第2月曜は休所)  
 ■ホームページ <http://www.city.kakogawa.lg.jp> (文化財調査研究センター直結QRコード)



## 新しい登録文化財

令和8年3月10日の定例教育委員会で、文化財審議委員会の答申を受けた平岡町新在家の「石造五輪塔」と、米田町船頭の「七騎塚の碑」が、市登録文化財に加わりました。

これにより、市内の指定・登録文化財は、国指定23件(うち国宝2件)39点、県指定33件55点、市指定72件1,429点、国登録9か所37件、市登録5件になりました。

このたび、市登録文化財に登録されたものは、日頃から地域の人たちがお世話をしてくださっています。このように市内には地域の人たちの手によって守り伝えられている文化財が数多くあります。

地域の文化財を大切にしてくださっている皆さま方に厚くお礼申しあげます。

指定・登録文化財をはじめ、市内には多くの文化財があります。先人たちが伝えてきた地域の文化財を、心豊かな生活のために活用していくとともに、次世代に継承していくことについてご理解とご協力をお願いします。

### 石造五輪塔 1基 市登録 建造物

寸法/高さ 223cm(基礎/高さ56cm 縦横各78cm、塔身/高さ61cm 最大径79cm、笠/高さ49cm 縦横各73cm、宝珠・請花(一石)/高さ57cm 最大径45cm)

材質/石造、竜山石(流紋岩質溶結凝灰岩)製

時代/室町時代、15世紀前期頃

所在地/平岡町新在家786番地の4

所有者・管理者/新在家町内会

この石塔は、西国街道(江戸時代の山陽道)沿いの北側に建ち、江戸時代の『播磨名所巡覧図会』に載るなど、よく知られている大型で重厚感のある中世の石造五輪塔です。

この塔の記録として、文化元(1804)年の『播磨名所

巡覧図会』に「新在家ノ古塔、傍らに松樹を四五本うへて事ふりたり故ある人の古墳なるべし郷人云後深草ノ院建長六年に薨ぜられし足利左馬ノ頭義氏の墓なりと云」とあり、鎌倉幕府を支えた足利義氏(1189-1254年)の墓と伝えています。

一方、『加古郡誌』に載る近接する横蔵寺の天和2(1683)年に補記された「寺記」には、この石塔の記述と考えられるものとして「彼勤堂前有五輪浮図。傳道義氏將軍古祠。」とあり、そこに見える「道義」の文字が室町幕府三代將軍足利義満(1359-1408年)の法名であることから、この塔が、義満の供養塔として伝えられたものではないかとも考えられています。

室町時代につくられ、江戸時代には名所のひとつとなり、現在も多くの人々が行き交う西国街道沿いに建つこの石塔は、大型の石造五輪塔として造形の規範となっているとともに、西国街道の歴史的景観の名残りを今に伝えています。



石造五輪塔

七騎塚の碑 1基 市登録 歴史資料

寸法／総高(碑石頂-下台下) 182.7cm  
 碑石／高さ105cm 幅43cm 奥行30cm  
 材質／石造、碑石及び上台は和泉砂岩製、中台及び下台は竜山石(流紋岩質溶結凝灰岩)製  
 時代／江戸時代 文化10(1813)年4月  
 文・書／表の文は古賀精里、裏の文と書は頼春水  
 所在地／米田町船頭306番地の2  
 所有者／船頭町内会

この石碑は、南北朝時代初めに、主君である出雲国守護塩冶高貞を追手から逃がすために、加古川のほとりで討死した7騎の武者を顕彰するものです。

表文は幕府の儒学者である肥前の古賀精里、碑陰文(裏面の文)と書は儒学者、詩人で頼山陽の父でもある安芸の頼春水によるもので、石碑は、文化10(1813)年、加古川驛本陣分家中谷三介らによって、加古川西堤の西国街道(江戸時代の山陽道)の南側に建てられました。その後、元の位置から北東方向に約130mの現在の大師堂の境内に移動しています。

南北朝時代の暦心4(1341)年、塩冶高貞が、足利尊氏の執事高師直の讒言により謀反の疑いをかけられ、京都を出奔し出雲に向かう途中、追手に加古川驛の西で追いつかれそうになった時、弟の塩冶重貞ら7人の騎従(馬に乗った家来)が、主を討たせまいと、この場

所に踏み止まり敵の軍勢と激しく戦い、遂に全員が討死してしまいました。この土地の人は、7騎の忠死を憐れんで、それぞれの亡骸の近くに塚を築いて厚く葬りました。後世にこれを七騎塚と呼ぶようになりました。宝暦12(1762)年頃の『播磨鑑』や文化元(1804)年の『播磨名所巡覧図会』など、江戸時代の地誌や名所案内には「七騎塚」は名所として詳しく記されています。

この石碑は、江戸時代の西国街道の名所として知られるようになっていた加古川を舞台にした物語を、優れた文章と書で表したものであり、文化史的な意義があるものです。

文化財関係印刷物刊行のお知らせ

令和7年1月から12月までに新たに刊行した文化財関係印刷物は以下のとおりです。文化財調査研究センターをはじめ関係施設・機関で閲覧することができます。また、解説シート及び報告書などの印刷物をホームページで公開しています。

西条古墳群国史跡指定50周年記念冊子『行者塚古墳～墳丘・造り出しと埴輪・土製品の概要』(2025年、A4判24頁)(配布用、残部有)
『加古川市文化財年報第8号 令和4(2022)年度』(2025年、A4判52頁)
文化財解説シート(2025年、各A4判1枚両面刷) 第41号『稚児窟石棺蓋』、第42号『行者塚古墳』、 第43号『人塚古墳』、第44号『尼塚古墳』 (配布用、残部有)

(以上いずれも非売品)

文化財関係出版物の販売

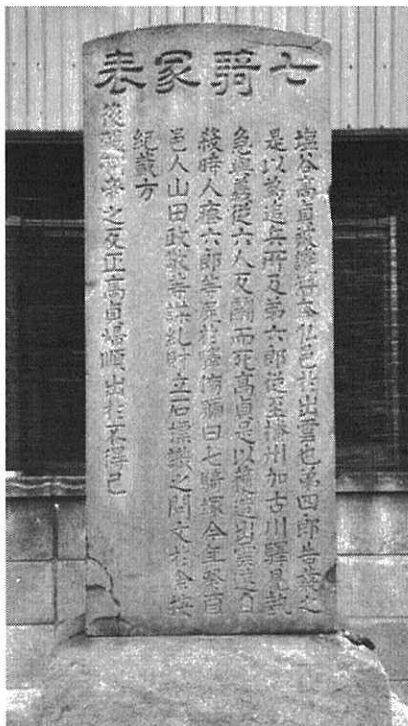
教育委員会では、過去に刊行した文化財関係出版物で残部があるものを販売しています。購入を希望する場合は、直接、来所ください。郵送の場合は、送料などが必要です。詳しくは文化財調査研究センターまで。

【普及図書】

『郷土のおはなしとうた第1集』 (1974年初版2023年二版重版、A5判96頁)	600円
『郷土のおはなしとうた第2集』 (1975年初版2023年二版重版、A5判94頁)	500円
『郷土のおはなしとうた第3集』 (1976年初版2023年二版重版、A5判94頁)	600円
『加古川市の文化財』(1988年改訂、A5判123頁)	1,000円
『加古川市文化財図録』(1995年、A4判107頁)	3,800円

【文化財調査報告書】

『岸遺跡』(1972年、B5判23頁)	200円
『山之上遺跡Ⅰ』(1977年、B5判8頁)	200円
『東中遺跡発掘調査報告書』(1981年、B5判106頁)	1,200円
『加古川市埋蔵文化財集報Ⅰ』(1983年、B5判28頁)	500円
『加古川市の民俗』(1985年、B5判291頁)	1,200円
『加古川市遺跡分布地図』(1994年改訂、A4判291頁)	1,800円
『奥新田西古墳発掘調査報告書』(2000年、A5判41頁)	500円



七騎塚の碑